

Title	椎名麟三論(上) : 「深夜の酒宴」から『美しい女』まで
Author(s)	西谷, 博之
Citation	聖学院大学論叢, 14(2): 250-234
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=214
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

椎名麟三論(上)

——「深夜の酒宴」から『美しい女』まで——

西谷博之

序

椎名麟三が処女作「深夜の酒宴」を携えて文壇に登場したのは昭和二十二年『展望』二月号であった。次いで「重き流れのなかに」が昭和二十二年六月号に発表され、翌年六月、『永遠なる序章』(三百三十枚)を河出書房から書き下ろし長篇小説として刊行し、戦後派の一人として押しも押されもしない第一人者となった。椎名麟三の文壇デビューは華々しいものがあり、当時の『展望』編集長の白井吉見は別にしても、花田清輝、伊藤整、平野謙、一返筆、中村光夫など錚々たる連中が初期の椎名麟三論を展開している。

椎名は昭和四十八年三月、自宅書齋で「脳内出血」のため享年六十歳で倒れるのであるが、伊藤整が昭和四十四年十一月胃癌で倒れる以外全員生存しているのだが椎名に対する弔問の言は聴かれない。それは兎も角、彼の処女作は「深夜の酒宴」であるが、代表作はとすると「深夜の酒宴」だったり、『永遠なる序章』だったりするのである。

世にキリスト教徒というものはいる。しかし、それは特別な人間ではない。仏教徒、あるいは無神論者と同じく彼らも人間であることに変わりはない。同様にして人間的眞実を描く文学があるとすれば、そこにはキリスト教文学などという特別なジャンルは存在しない。あるのは文学だけであり、問題にすべきは優れた文学かそうでないかという判定だけである。

これは、『内なる軌跡——七人の作家達——』上総英郎(朝文社・一九九〇・九)の冒頭の言であるが、確かにその通りであろう。しかし、日本の現状を見ると純文学とエンターテイメント、歴史文学、SF、児童文学等々細分化されているのも事実であり、昭和二十五年十二月赤岩栄によって洗礼を受けた椎名としては、キリスト教文学を文学のジャンルとして確立したかったのに違いない。ただ言えるのはその文

学が護教文学かどうかということだけだろう。

昭和四〇年に発足したキリスト教文学会は最初は『キリスト教と文学研究会』（傍点西谷）であり、それはあく迄もキリスト教と文学との関係を研究するものであった。残念ながら、このキリスト教文学会には椎名は入っていない。その代わり、自分で『たねの会』を創って、その会長に納まった。なおこの『たねの会』は今も存続している。キリスト教文学会の方は盛況で現在会員四〇〇名を超える程になっている。ところで、「深夜の酒宴」の主人公は須巻という椎名を思わせる若い男であるが、文体は自然主義的なりリズムを思わせるものではない。

僕には思い出もない。輝かしい希望もない。ただ現在が堪えがたいだけである。現在が堪えがたいからといって、希望のない者には改善など思いがけないことだ。一体何をどう改善するのか。欲望という奴は常に現実の後から来る癖に、影だけは僕たちの前に落ちていくので、その影にだまされて死ぬまで走りつづけるような大儀なこととはしたくないだけなのである。だから僕をニヒリストだと思われるのは至極道理だ。だが僕の世界中で一番さらいなものはこのニヒリストという奴なのである。ニヒリストと聞いただけで加代に感ずるような嘔吐を催すのである。

「深夜の酒宴」は(五)章から成り立つ九五枚の作品であるが、この部分

は(一)章の最後の部分である。主人公須巻は雨の降る日、牢獄を想わせる伯父仙三のアパートで「一日中何も食べていな」い空きつ腹をかかえて壁に凭れている。伯父仙三は今度の大戦で右脚を足首から失い、妻や家も空襲で失ったのである。加代は売春婦であり太った二十歳の女性であるが、性格的にはだらしがない。椎名の作品は長篇『美しい女』に至るまで主人公の好きな女性は「太った女」であり、性格的には「きちんとした女」であることが条件であり、そうでなければいくら太った女性でも外面的には引きつけられるが、加代に対するように結果的には吐き気を催すのである。そういう風に描かれている。

この「深夜の酒宴」が発表されたとき、多くの批評家と読者が「ニヒリズム」と『絶望』の文学として、非難し、また同感して来たことを曰井吉見が「生への激情」で書いている。この抜粋した部分だけを見ても、絶望は別にして、「ニヒリズムの文学」などは決して出て来ないと思うのだが。尤も文章そのものについては、悪文であるというのが定評で今その一例を挙げると

「黄昏の回想」(『風刺文学』昭和二十二年八月号)に至ると、もはや人々はそこで「またか!」の感を受けざるを得ない。

たとえば、最後に近い一節。今は老いたるマスターが杖を引きながら、百貨店の階段を降りるところを「その杖は一段降りるたびにこつこつと小さなひびきを立てるのだった」まではいいが、それに つづいて「その孤独な心細いひびきは、なんと運命的な永劫の感じ

にあふれていただろう」を読んだ時、僕は正直のところ、つくづく椎名氏における「言葉の貧困」を痛感せずにはいられなかった。しかも、この詠歎的口調もまた！

この十返氏の批評はそっくり「深夜の酒宴」に返すことができよう。四章の中間部分に次のような表現がある。

僕は再び喘ぐように歩き出しながら、その真実さを確認した。この瞬間の僕は、自分の人生の象徴的な姿なのだった。しかもその姿は、なんの変化もなんの新鮮さもなく、そっくりそのままの絶望的な自分が繰り返されているだけなのである。すべてが僕に決定的であり、すべてが僕に運命的なのだった。そこにみじんの偶然も進化もありはしないのだ。絶望と死、これが僕の運命なのだ。(傍点、西谷)

しかし、一つ言えるのは「深夜の酒宴」で〈重い〉、〈堪える〉、〈絶望〉などのことばを他のことばで言い換えることはできないということである。デビュー当時の椎名にはいろいろな欠点もあったが、それを上まわる新しさがあった。椎名のデビューが昭和二十二年二月の「深夜の酒宴」となっているが、作家を志したのは昭和十三年である。「鳥長の家」は昭和十三年六月二十九日、本名大島昇の名で脱稿された。本名、大島昇の名で脱稿した原稿は一篇だけであるが、デビューまで

長短種々の小説を書いていて、斎藤末広氏の言によると、「既にプロフェッショナルな作家として、椎名は名実共に出来上っていた」のである。早くから行動を共にしていた船山馨によると「彼の作品はずっと後まで、仲間うちでの評判は芳しくなかった」ということになる。これは椎名が小説を読むのがドストエフスキーが始めてであり、ドストエフスキーの「悪霊」を読んでショックを受け小説家になろうと決意したことにもよるが、それまでの日本の小説の本道は自然主義リズムにあると確く信じられていたから、椎名のような新しい作品は仲々受けとめられなかったという経緯がある。

滝井さんが、悪文の見本として、大岡、武田、椎名の三人の文章の一節を挙げて居られるが、椎名を表現派といったのは適評です。文章の点からいえば、つまり今までの国語の破壊者なのです。しかしほくは、今までの日本語を破壊しなければ表現できないものが椎名君の内部にある。また日本の現実の中にあると言いたい。その破壊作業の最中なんだ、椎名君は。

これは『文学界』(昭二十七・八)における亀井勝一郎と臼井吉見の対談で、亀井の発言であるが亀井勝一郎は椎名麟三に対しかなり好意的である。何故椎名が日本独自の自然主義リアリズムを嫌ったのかは審かではないが、船山馨、亀井勝一郎などの言からも推察できるように椎名の小説は、今までの日本の自然主義リアリズムの枠を破る新し

いものであった。何しろ、小説らしい小説を読んだのはドストエフスキの『悪霊』が始めてであるという椎名にとって、日本の自然主義など無縁であったろう。周知のように椎名は姫路中学三年の時退学、以後見習コックや出前持ちを経て十八歳の時、宇治電鉄車掌となり日給一円十銭であった。またこの年十八歳で日本共産党員となり、二十二歳昭和八年懲役三年執行猶予五年の判決を受け大阪の刑務所を放り出された。これらは椎名の年譜を練つての斎藤末広氏の受け売りであるが、昭和十三年作家になろうと決意するまで、文学らしい文学は無縁でありプロレタリア文学にしても「労働者のニヒリズムが描かれていないということが無縁であった」という。そういう椎名がニヒリズムの文学と誤解されたことも頷けるのであるが、もう一つ実は大きな問題がある。

あなたの好きなデモクラシイだって、思想である限り思想としての運命から免れることは出来ませんよ。思想である限り必ず対立と抗争を予言している。どんな偉大な思想だって、人類の平和と幸福を目的としている思想だって、ちゃんと人類を戦争と破滅に導くという悲劇性を自然にふくんではいるんですよ。人間が思想を持つのは、ただそれが便利だからですよ。……全く思想なんか豚にくわれてしまえだ。思想なんかせいぜい便所の落し紙になるくらいなものだ。

〔深夜の酒宴〕 傍点西谷

この「便所のおとし紙」が問題になった。特にインテリを自称している者にとって、あるいは又思想に殉じようとしている者にとっての反撥が殊に大きかったのである。

氏は戦後文学というひとつの病的な社会現象を象徴する存在のようにさえ僕には思われます。氏ほどその出現が華々しく、急速に名声を得た作家は、おそらく戦前にさかのぼって見ても類例がないでしょう。「深夜の酒宴」の一作で氏は独自の文体と際立った個性をもって登場し、独自の形而上学を持っているようにさえ一部の人々からは見られています。(中略)「あまり容易に世間に受け入れられるものの価値については警戒しなくてはならぬ」とジイドは云っていますが、すべてあまり簡単に流行しすぎるものは、その流行性のなかに弱点を潜めているのが普通です。そして椎名氏の場合も、おそらくその例外ではないので、虚無とか絶望を標榜した文学が、こゝう他愛なく流行物になるのは、そこに盛られた思想が手軽だからこそと思われませんが、更にここで問題を複雑にしているのは、この手軽な思想も氏にとっては精一杯のポーズであるため、そのもたらした流行の第一の犠牲者は氏自身だということです。

これは『知識人』(昭二十三・十二)に載った中村光夫の「独自の壁・椎名麟三氏の作品」の極く一部であるが、「深夜の酒宴」も全員が暖かく迎えた訳ではない。

続く「重き流れのなかに」は『展望』昭和二十二年六月号に発表された。「僕は、『深夜の酒宴』を発表してから何もしなかった。しかし、絶えずあの疑問、何故自分は生きているのだろうか、という疑問が、ふとした瞬間に自分に襲いかかり僕を笑うのであった。一切は無意味ではないか。するとお前のただ一つの自由は、自殺だけではないか。だが自分は死ぬことは出来なかった。死ねないということ、それだけが僕が生きている唯一の理由なのであった。それに気づいたとき、僕は何かへの憎悪を感じた。そして『重き流れのなかに』を書いた。

——『文学について』

作品の持つ雰囲気は前作「深夜の酒宴」とほとんど変わらない。ストーリーは中風の寺島辰造、妻つね、息子秀夫、二軒長屋の隣りには町田一家がいて困りは山手のお屋敷である。町田家は七人家族であり妻かねは四十六歳で七ヶ月の大きな腹をかかえる妊婦でもある。飴の間屋をやっている今年五十になる夫は、妻かねに甲斐性なしと云われ五人の子供もそれにならっている。主人公須巻はその寺島一家の六畳・三畳のうち三畳間を借りているという設定になっており、今年二十歳になる町田せつ子は、二十三歳の青年大木の恋人であるが大木は銀座を一〇〇人の女性を連れて歩くのが夢である。せつ子は三人目の恋人であり、一〇〇人まではまだまだ遠い。このせつ子は大木が来る日、そのふるまい酒にメチルアルコールを一滴たらずのが仕事である。須巻にそれをとがめられたが、せつ子の答えは、「何さあんたは！働きのないろくでなしじゃないの。エチルなんて知ったかぶりをして、この

部屋を見てごらん。何一つないじゃないの。盗まれるなど余計な心配だわ」須巻の部屋は大木が来る日、狭いので一〇〇円で大島家から借りたのである。勿論金は大木が払ったのだが町田一家は揃って手癖が悪いという評判だったのである。

せつ子の恋人、大木は三人目の恋人を持ったことよって肺結核で倒れ町田家には来なくなり、辰造の一人息子秀夫は家を嫌って家出する。今という家庭崩壊が始まったのである。表現は、(重い)、(堪える)、(絶望)などの言葉が極端に少なくなりそれだけにストーリーに動きが出て来た結果、「深夜の酒宴」を初めて読んだときの様な印象は受けないであろう。今ストーリーに動きが出て来たといってもそれは決してプラス指向ではない。フィルムに例えればネガである。ネガでも反転すればポジになるではないかということかも知れぬがそれは理屈である。今伊藤藤整の昭和二十三年一月号の『近代文学』——戦後文学について——の一部を紹介する。

現象には何等の自発性、自由がない。死物である。だから私は初め「深夜の酒宴」を読んで分らなかった。現象が全て死物なのだ。一本の草も生命から動かない。それでは日本の文壇では一種の徒弟化された模型作品としか見ないのが当然なのだ。新しい型であるが、これを若しマルクス主義でやったと考える。すると公式主義の典型になる。

しかし、伊藤整のために弁護すれば、『永遠なる序章』は内容は別に面白かったと言っている。つまり小説形式の新しさに打たれたのである。

『永遠なる序章』であるが書き下ろし長篇として昭和二十三年六月河出書房から単行本として発表された。主人公砂川安太は、肺に大きな空洞があり、あと三ヶ月の命である。三ヶ月の命であると確定したとき安太は何故か今まで感じたことのない（生）の充実感を覚える。「彼は、呆然と石の上へ腰を下ろしながら、やはり歓喜にあふれている自分が不可解なのである。」安太はそれまでどうしても死にたいのに死ねなかつた。十六歳のときの様に自殺することもかなわず、それなのにあと三ヶ月の命しかないとい医師に言われて（生）の充実感を覚えるとは、「不可解なのは、その自覚が何故死に定つた今であるかということなのだ。」砂川安太は二十六歳第二次大戦で召集を受け戦争で片足を失い下士官となって帰国したという経歴である。

全体としてひどく明るいらリズムで貫ぬかれている。すべてのものに重く堪えることが生きることだったとどされた「深夜の酒宴」とくらべるとき、むしろまったく違った世界である。作者はここで死という絶望的なものと対決して人間存在の意味を問おうとしている。迫りつつある死という絶対の不可能のなかにこそかえって真に生きる意味のあることを実感する消息が描かれている。³

安太は「おかね」おばさん、七つと五つの男の子の母の家の二階に下宿している。そこへ登美子を案内する。彼女は友人軍医の妹であるが、今は売春婦となっている受け唇の美しい女性である。登美子は偶然を信じて毎日を辛うじて生きているが、兄の銀次郎は完全なニヒリストでありながらキリストに詳しい。つまりいつも死にたがっているのに神を信じるのが出来ない男として登場する。安太は安下宿の二階に登美子を案内しながら、「おかね」と姦通する。「おかね」は「だまされた」という。「おかね」は醜い。しかし、安太は自由を感じる。

しかし、この自由は、自分に持ちこたえられぬほどだ。何か行動へ解消しないかぎりは、自分が、破裂するだろうという感じが安太を強く動かしている。その彼にとって、彼をおかねに結び付けたと思われる醜悪への意志が、そのまま革命的な意志であるように感じられてならないのである。（『永遠なる序章』）

安太はデモに参加する。（おかね）のいう「金を追い越す」ストライキを目指して。が最後はあっけなくやって来る。安太の肺結核は寿命三ヶ月の筈が五日で終つた。しかし、なんと充実した（生）であつたらうか。

椎名麟三は二年半後の昭和二十五年十二月二十二日受洗する。椎名はキリスト教文学者として全くのパイオニアであった。私に言わせればこの『永遠なる序章』で彼としてのキリスト教文学の方法論は止め

ておけばよかったのと思う。全く難しい問題である。作家を取るか、キリスト教を取るかは。この二者を熟すことのできる者はまだ日本では現れていないと思う。何故椎名はここで止めて置けば良かったのか。それは洗礼を受けることによって有形無形の圧力があつたと思われるからだ。書きたいものが思うように書けなくなったのではと推測するからだ。しかし、椎名は約三〇年前に亡くなつていたら「タラ…、レバ…」の話はどんな世界でもタブーである。

二、

実を言うと『永遠なる序章』の前に「深尾正治の手記」という中篇小説を昭和二十三年一月『個性』創刊号に発表している。この小説は椎名の発見者である『展望』編集長であつた臼井が強力に否定したものである。

ただ、この間に『深尾正治の手記』があり、作者は、これを『深夜の酒宴』『重き流れのなかに』につづく第三作の意味でかいたといひ、「現在流行の四つの世界観を、僕の許し得ない一点から抗議したものだ」とかいているが、僕は率直にいつて、これは失敗作どころか、愚作だと思つてゐる。論文なり、評論のかたちをとらず、こういうものを小説にかかねばならなかつたものを僕はくみとることができない。(中略)もつともいままでも椎名麟三を認めなかつたが、

この作品ではじめて認めたなどという批評家が一人ならず現れたのに呆然とした。(後略)(この種の話が延々と続く。西谷記)

今から見れば、臼井がこれほどく言わなくてもあたり前のことなのだが、つまり当時は転向者が多かつたのと、椎名麟三の「深夜の酒宴」が新し過ぎて理解できなかったことであろう。なにしろ、ソ連の共産主義全盛の頃である。転向者にもそれなりの理由があるろうし、日本の文学など自然主義リアリズムの他は考えられなかつたに違いない。尤も臼井に特別この作品に対する個人的な想いがあつたら別である。

臼井吉見は、「深尾正治の手記」にふれて、「いままでも椎名麟三を認めなかつたが、この作品ではじめて認めたなどという批評家が一人ならず現われたのには呆然とした。」と書いていた。この作品によつて、はじめて椎名麟三を知つたと思つてゐる僕など、さしづめ臼井吉見を呆然たらしめる批評家の一人だ。

本多秋五のように正直に自分の立場を述べた者は管見するところ皆無である。それだけ椎名麟三の文学は新しかつたと言へる。「深尾正治の手記」は「この手記は、獄死した友人のノート的一部分で、そのノートは、彼が最後に検挙された当時の警察署の特高がもつていたのである。勿論その時彼は、共産黨員として検挙されたのだ。」という前置

きがあり、昭和十年六月十九日から七月十二日までの約一ヶ月足らずの日記から成り立っている。この日記はこれまでの椎名の作品とは全く違っており深尾正治の一ヶ月足らずの行動を通じての自伝風作品である。

この小説を私は高く買う者であり、椎名としても愛着があるのではないか。想像するにそれはつかの間のことではあるが、椎名にとつて書きたいものを自由に書けたのではないかと思う。くどくなるが少し詳しく見て行きたい。

六月十九日

胃痙攣には唯物史観は役立たぬことを身をもつて知る。この木賃宿にはテキヤの池田と貰い屋の小山、「蠅たたき」と称される山崎重次郎、共産党員の私の四人だけである。何故、杉山のいる町なんかへ逃げて来たのだろうか。

六月二十日

雨。「ゴム長さえあれば」と池田が云う。小山は駅前に売っていると。池田は、小山が東京で如何にへまをやったか、そして死にそこなったかをいい、小山に命ずるのだ。「お前、張り子の虎かい。さつさと行つて来い。」

六月二十日

この宿に一〇〇年もいる感触。回想。両親の顔を知らず、兄は東京で行方不明。妹は紡績の寄宿舎。家は人手に渡る。深尾は肺病。町の神社の石段に腰を下ろしていて町の男に追い払われる。食堂で飯を

食つても一皿少なく料金は同じ。宿の主人であるじいさんが、農夫の恰好でつぎはぎだらけの股引きをはき、自分で取つた鱈を問屋にもつて行こうとしているのに出会う。彼は二十年ほど前行方不明になり、去年突然帰つて来て宿を始めたのである。

六月二十五日

雨。昨晚の決意。夜が明けたら宿を出て故郷へ帰ること。しかし、眼が覚めると雨だ。薬局でヴェロナール、アダリン、カルモチンの全て無いと言われ、雨が強くなつて来たこともあつて行きたくなくなつた。杉本の住所を思わず聞いて了う。杉本庄造、三軒長屋の一軒。柱時計が夜の八時を告げる。それは貧乏人杉本の家から響き、全く杉本と柱時計は不似合だ。彼はまた元の木賃宿に帰つてくる。眼をさますとあの飽くことのない重苦しい、重次郎が蠅をたたく音が聞こえてくる。

六月二十六日

木賃宿に泊る客は皆二階に上つてくる時だけ挨拶するが、あとは押し黙つたままだ。食事の時下へ降りるが食事が終ると女中かじいさんが宿帳を持って人々の住所や名前、行先を聞いて回る。勿論でたらめでもかまわない。翌朝宿に残るのは例の四人と、四五日前から二十歳の肺病病みの娘が重次郎の隣の部屋にいる。立てない位胸が悪いのだ。小山が宿を立とうとした。池田が逆上して小山に云う。「この乞食野郎。俺を見すてやがったら承知しねえぞ」小山と池田はなんの関係もない。元銀座で一緒だったこともない。小山としては貰い屋と

いう仕事上一ヶ所に居つくことはできない。しかし、小山はある種の工業製品の知識はかなりのもので、やくざとのつき合いが始まるまでは防水紙を作る仕事をしていたので。

六月二十九日

山崎重次郎が肺病病みの娘の部屋へ忍び込む事件がおこる。女中となつは自分の男に会いに泊まりがけて刑務所へ行って留守であった。池田がいきり立つ。山崎は観相家であるという。最初娘が自分の運命を占って貰った。山崎のご託宣は冷たいもので「二、三日うちに血を吐く。そして二週間たたないうちに死ぬ。」というものであった。山崎の言を信用するなら、忍び込んでも何も出来ぬかたわものということになる。その山崎がついでに小山の運命判断をする。「あなたは発明家として成功する相がある！」

小山は山崎の言に度を失い、急に実験道具を買いに走る。その小山を見て、深尾正治は危険な気がするのだった。

七月一日

「派手なチェック縞の烏打帽を目深にかむり、鼠色のレインコートを着た男が」雨の中に立っている。深尾は思はずギョツとする。特高だ。途端、自分に理解できない感情が起こる。「まるで凱歌のような歓喜が、鋭い戦慄となつて」襲ってきたのだ。堪えられず深尾の方が下へ降りて道の両側を見る。彼ははいない。向うから来るのは、よれよれの学生服の男小山である。彼はぼんやり笑っている。山崎の間断なく蠅をたく音。今日も何事も起こらない。しかし、今日のこの二階は六畳と

八畳の部屋は満杯で一つの床に二人ずつ一緒に寝なければならぬ。

七月四日

池田が外出先から帰るなり、小山を殴りつけた。小山はよほど激しく殴られたのか、実験道具の上に倒れて了った。池田が去ると小山は再び実験にとりかかり、「もう一息だ。」という言葉で吐く。小山の実験はハトロン紙を皮のように丈夫にするもので、これが完成したらマスコミが大勢かけつけるだろう。彼はマスコミ相手の言葉まで用意しており、しかも翌日山中で自殺するのだという。「そうしなければならぬような気がする」のだというのが小山の説明である。その時、池田が帰ってきて三十円ほど入っている紙包みを投げ出し、蠅たたきの悪口を言い、小山は蛆虫野郎だが、その蛆虫を必要としている俺は「半端人足」だという。小山は蠅たたき野郎にだまされているにすぎない。しかし「あの野郎の八卦は当るんだ」といい、階段を降りて行く。真蒼になつて帰つて来た池田は「俺に水難の相があ」り近い内に水で死ぬというご託宣を貰ったのだ。深尾は池田の投げ捨てた三十円を持って階下の娘の所へ行き、大切なのは生きる勇氣だと伝えるつもりが、実際に彼女に会うと口をついてでたのは全く違ふことばで、「僕はたしかに救いがたい人間である。」と思うのであった。

七月五日

七月一日昼すぎと同じ男が路の向側に立っているのを見つける。しかし、今度は何の感情も湧かない。男は杉本だった。僕より十歳も年の彼は二階に上つてくると挨拶し「平温無事っていいもんだね。俺は

心から気に入っているんだ」という。「お前は全くえらい。こんな時勢でも節をまげないし、そりゃ俺は脱落者だ。俺は、赤はもうきらいなんだ。お前はえらばれた人間だ。共産党は平等の名のもとに極端な不平等が行われる……」彼はこう云い捨てると突然階段を降りていった。彼が居なくなると、いい知れぬおかしさを感じる。杉本が来たというのに何の感想もない。昼、ごろごろしているのは深尾だけである。山崎は一日中、絶間なくとんで来る蠅をつぶしている。恐らく彼の真の敵はブルジョアではなくて、あの音であるかも知れないのだ。

七月六日

深尾に「再びあの幻想が帰って来ているのだ」った。「日のよく当る広い庭の麦の穂。くるり棒がくるりくるりと廻って振り下される物凄いいリズム。」小山は独りになると二階へやって来て「池田さんも居ない。山崎さんも居ない。」と呟く。「どうしてうまく行かないんだろうな。」深尾は池田の代わりにあの実験道具を滅茶滅茶にしてやろうと思ひ降りて行く。しかし何事も起らなかった。階段の陰から美代が金泥の仏画を燃やす焔が見えたのだ。彼女は深尾に見つくと怒りのためにふるえる声で「お金忘れているから持って行って下さい」という。彼はなつへ美代がおかしいことを告げて二階に上がる。そのとき杉本が意気込んでやって来て云う。「お前が共産党員になった訳が分った。お前はただ、仲間のものへ威張りたかったに過ぎないんだ。」共産党は共産主義を実践に移す政治機関なのだ。だからその構成員である共産党員は全て大衆を愛しているということになる。「何か一番大切なものが

抜けてやしないか。……大切なのは愛なのだ。」といい「今度こそはこれっきり会うもんか」という捨て台詞と共に帰った。

七月七日

昨夜遂に眠れなかった。彼は階下へ降りる途中、美代の部屋の前で立ち止まった。いうに耐えない衝動に駆られたのだ。彼の衝動を救ったのは彼女の軽い咳であった。小山がじいさんに実験が上手く行かないことを訴えている。朝食のあとで突然また杉本がやってきた。「お前にとつては、共産主義は自分ひとりだけが仲間のものから優越するため的手段だったのだ。お前が本を書くような学者を軽蔑していたのも、それから説明できる。それは嫉妬心からだよ。」杉本は叫ぶ。「愛が思想で得られるとしたらこの世は暗闇だ。」杉本はお前とは絶交だとの言葉を残して階段を降りて行った。何となく深尾は杉本を殺して下いた衝動に襲われていた。

七月九日

小山が幽霊のように僕の側に立っている。彼は泣くような声で「どうしても上手く行かないんです。」池田さんも死んでいたらしいのです。水に落ちて……」という。階段を降りると山崎が「深尾さんもわしの運命判断をして貰いたいのかい。」と聞く。深尾は限らない憎悪を込めていう。「死ぬんだろう」と。全く死は逃れることの出来ない運命的な必然性には違いないと深尾は思う。外出先から帰った彼は、変な予感がして美代の部屋の障子をあけた。彼女は生きていた。暗い眼をして。彼は彼女の唇へ接吻をすると「……ところで十円もっていませんか」

という。美代から真新しい十円札を借りて一杯三円のウイスキーを二杯飲む。宿へ帰ると小山が便所で首をつつている。死んだ者には用はない。深尾はぐっすり寝込む。眼を覚すと真夜中である。山崎が帰って来た。彼は逃げない。何事も起きないことがいつまで続くのか。

七月十二日

美代が死んだ。山崎の予言は当たった。相変らず山崎の蠅たたきの音をする。その音を聞くと深尾は重大な決意をして階下に降りて行く。と思いがけず宿のじいさんが「若い人は気が早いな。全くみんな簡単に死んでしまう。」という。山崎が突然じいさんをからかう。「どうだ。お前は神様を信じているだろう。ヤソかい。」じいさんの顔が真赤になった。山崎はじいさんの包丁でさされる。じいさんは警察の手をのがれて逃げて行く。丁度外から帰ったなつに手助けさせて山崎の身体を部屋まで運ぶ。彼の身体はガランドウを思わせる程軽かった。山崎も死ぬ。杉本がまたまたやってくる。「俺は大衆を愛することが出来ない。俺はお前を密告した。俺は裏切り者だ。」という。そして帰って行く途中、ふり返って「共産党万歳！」と叫ぶ。深尾の階下には、あの死臭と腐敗毒をもった、世の中で一番憎むべきものが、横たわっている。深尾は何を待つのか。警官か、死か、それとも……。

「深尾正治の手記」を可能な限り、再現して見た。といっても十分の一以下である。この作品は長篇ではないが、短篇でもない。手記ものの中で一番良くできたものではないかと思う。「手記もの」は自伝もの

と外伝ものに分けることが出来るが、椎名の長篇では「手記もの」が巾をきかせているが、その割に成功していないのは、「手記もの」の限界であろうか。

三、

椎名麟三の受洗後の最初の長篇は、昭和二十七年二月講談社発行の『邂逅』であった。その前に長篇『赤い孤独者』があるのだが、発刊が昭和二十六年四月のため、洗礼後初めての長篇小説と誤解され勝ちだが、これは長篇でもあり、受洗する前に企画された小説であるといつてよい。又椎名はキリスト教はよく解らないがドストエフスキーにより、キリストに賭けるつもりで受洗したのである。「聖書を本格的に読み出したのは受洗後である。」という本人の言は信用できよう。斎藤末弘氏の『邂逅』解題によると、創作ノートは「昭和二十六年夏乃至秋ごろから書かれ」たものらしく時期的にも一致する。

一方、『赤い孤独者』は椎名本人失敗作であると言っている。あれこれ詮索するのは止めるが、失敗作である大きな理由は、革命党でない革命党なるものを主人公の兄の長島伝一が牛耳り、その団体に神を信じないクリスチャンと称する榎本老人が居ることだろう。これではこの団体は何を目標にしたら良いのか分らないと思う。

さて『邂逅』であるが、主人公古里安志は電気工夫であり、給料は日給、雇っている会社は経費節約の意味で安志を設計見積の電気技術

者として、間に合わせて使っているのである。要するに身分も不安定である。その埋め合わせでもないが内職として夜鍋仕事としてラジオを作っている。古里平造（安志の父）は肉体労働者であるが片足切断で緊急入院した。三時間ごとに当時新薬であるペニシリンを打たねばならない重傷である。野原和也は日本証券調査課に勤めるブルジョアの息子である。平造の関心は自分の片足の値段である。一生跋で暮さなければならぬ代償として会社から取れるだけ取っておこうとする腹積りで、その交渉には安志を使うつもりである。妻のたけが側に控えているというのに。

野原和也は人生の目的を失い、全てに対して不満である。自分のベッドに対しても、妻や妹に対しても。唯一心が安まるのは趣味の「切手蒐集」に没頭する時だけである。和也は「意味がなければ、一銭だつて出し惜む俗人達に、この無意味な執心の喜びが理解できるわけはないのだ。」と思う男である。和也の妻沢子は単に病弱であり大人しい女であるに過ぎないのに夫和也は「抽象的な美しさがあるんだ。抽象的な！」と誤解して妻を迎え、今では妻のすべてが不快となっている。

「彼はベッドのなかの何の反応もない白い肉体を思いうかべた。長々と無気力に、ただ従順に伸びている細長い脚。小さな乳首。アルコール漬の胎児のようにぶよぶよしているあの乳房。たしかにそれらはあの女の罪ではない。しかしあの肉体は、やはり死んだ肉体だ。」

和也の妹実子は金のかかる女性である。しかし、「上背のある」「少しも曖昧なところのないはつきりとした」顔立ちの美人である。その

実子に安志は「親愛を感じながら、心に眩」く。「あのオーバーとおれの間には、埋めることの出来ない断絶がある。」「出身階級という、どうにもならないものが、あの女をしばらくつけている。」と感じる。その割に安志と実子が共にいることの多いのは、一つには実子が安志を軽蔑しながらも安志に惹かれていることをあげなければならない。しかも、そのことに実子は気づいていない。実子は女の武器を最大限に生かして生きようとする。そして「私はあくまで自由よ。」と主張する若い女性である。『邂逅』は八章からなるが、その最終章で安志がクリスチャンであることが分つて了う場面がある。それに対して実子は「安志に対する現実的な拒否をつかんだと思った。その拒否こそ、確実で動かないものなのだ。わたしが、確次さんのもとへ求めに来たものはこれだったのだ。」

けい子は安志の妹である。そして石田確次の元恋人である。石田確次は共産党員である。確次は全て未来の自由のために自分を犠牲にしている。確次と安志は碎石工場と一緒に働き、終戦の翌年労働組合を組織した。確次が共産党員になってからも安志は協力的だったのだ。しかし、安志に対し共産党員になるように勧めると俺は自由だからと断つたのである。安志としては自分が自由だから共産党を絶対的と認めることは出来ないという。確次は党を絶対的なものとして

いる。けい子と確次は元恋人同志であり、今はお互いは愛していない。けい子に対する確次の愛は実子に向う。しかし、実子はそんな確次を相

手にしない。けい子は「死を決心した女」であり、それ以来家族を無視する。それは実子が全ての係累を無視するのと五十歩百歩である。ところがけい子は死ぬつもりで荒川に入る。川の水は「あまりの冷たさに、齒までがたがた鳴り死ぬことに失敗する。そして、兄の安志に逆らうことを止める。

ここまで書いてくると椎名が現実の世界を全て相対化しようとしていることに気がつく筈である。つまり、実子とけい子、野原和也と古里平造、和也の妻沢子と平造の妻たけ、この人々は皆相対化されて書かれている。例えば平造は、肉体労働者の最後を思わせる様に急に容態が変わり死ぬ、又和也の死はブルジョアのデカダンスを意味するが、「塩酸コカイン」5%の溶液を1ccウイスキーに垂らし、それを飲むことよって恍惚となって死ぬ。相対化することにより、平造と和也の死に対する想いの違いが分るのである。

この『邂逅』が何故、椎名の代表作にならないのかというと、作者自身が意気込み過ぎた、ということがあげられる。それと、七章において安志が自殺に失敗した妹に向って一人言ちる所があるが、それがキリスト教徒の自己宣伝、つまり護教になって了っていると思われるのである。椎名はこの作品を書くとき、「永い酒への耽溺を自己喪失の後、ドストエフスキーの忠告を唯一の頼りとして、キリストへ自己を賭けた。それはキリスト教の洗礼となってあらわれた。『邂逅』は、自己清算の必要にせまられ、過去の自己と対決するために書かれた。」⁵⁾ といっている。主人公安志は語り手であり、事件の当事者でもあるの

だが、恰好が好すぎる。安志と相対関係にある確次は恋人で失敗し、いかにも共産黨員らしい一元論で進捗するのに対し、安志は少なくとも二元論であり、確次などに言わせると曖昧なところがあるということになる。安志に言わせれば曖昧どころか、これは真の自由をもたらす余裕となるのである。

こうして古里安志の一家を中心にして事件は進んで行く。最終章、けい子に対する会社の辞令を返すために、安志、確次、実子、けい子、岩男がつれ立って会社に行く。安志は「このおれと彼等との溝は、絶対的なものではないと思」うのであった。この『邂逅』をユーモアから論じたものがある。

「邂逅」には自然のユーモアはない。ここではすべてが、相対として意識をもって把握される。思想も、戦いも、おそらくは信仰も。作の手法としても、登場人物の各自の意識を多元的にあらわしているのは作の世界を相対へと解体したかったのだらうと思われる。もつともその相対は、相対のまま、相対の肯定者としての主人公安志の意向に統一されて行くのが、この作の骨組なのであるが――。

(中略) (このような方法は、注西谷) 作品から行為が影をひそめるという難点をもつ。意識者としては各自は、高い存在者からみれば相対的なものであるにせよ、当人の主観では、絶対的な小宇宙、無限の可能性を自己のうちにもっているのです、その絶対から降りてこない限りは行為は生れてこないのです。行為というものは、無限

の可能性を捨てた自己の具体的限定で、意識とは本質的に異なるのである。ハムレットは意識するかぎり、復讐することはできない。復讐するときの彼は、意識者ではない。意識に住めば不良少年も不良少女ではありえず（中略）「邂逅」では、意識の照射が多面で行為の誕生が非常に窮屈にされているので、ユーモアの舞台は狭くなっている。そして、この作における行為とは、無意識のものではなくて、現実におけるすべての事を相対と意識し、「したがって、自己の行為をも苦しみの受容をも、相対と意識」して、その意識をとまなつてする行為なのである。だから、それはユーモアそのものとはならず、ユーモア観、ユーモアの哲学にとどまることになった。

四、

『美しい女』は『中央公論』昭和三十年五月号〜九月にかけて連続発表され、同年十月に中央公論社から単行本として発刊された長篇小説である。この小説は四章までの構成であるが、最初から最後まで「美しい女」が出てくるのが特色である。この「美しい女」は何を意味するのか。「美しい女」は神かと思つたがどうもそうではないらしい。「ごまかし」であるという説があるけれど単純にその意見には同意できない。『美しい女』は関西の私鉄に働く労働者の半生記である。木村末男は四十七歳になる現在まで大げさなことが嫌いな男であった。全く彼は「高級な苦惱だとか遠大な理想だとか高邁な精神など」とは

無関係であった。彼が独身の頃は当然のこととして「美しい女」は良く顔を出す。一章だけで二〇回の「美しい女」が出てくる。

私の心に痛切にうかんで来るのは、美しい女への思いだった。このようなおかしな自分から救い出してくれる美しい女だった。しかし、私の美しい女が、どんな顔をしどんな姿をしているのか、さっぱりわからなかったのである。ただ美しい女への思いがうかぶと、私の心のなかに、何か眩しい光と力にみだされることだけは事実だった。いわば美しい女というのは、まるで眩しい光と力そのもののような工合だったのである。（『美しい女』第一章）

友人の妹である売春婦倉林きみは「美しい女」ではない。何度か肉体的な関係を結ぶが、彼女のだらしない性格と手癖が悪く木村とは一緒になれなかった。木村の妻になつたのは飯塚克枝である。克枝は「大柄な肥り気味の身体に生気のピチピチ感じられる女」性だった。私鉄に入ったばかりの彼女は女学校出の十八歳であり、「物事にもひどく正確」で木村はたちまち彼女に惹きつけられた。克枝は家と会社では全く性格が違い、家に帰ると母親にあたり散らし会社にいる時とは全く違っていたのである。木村はそのような克枝に惹かれたのである。そして「あの女、過ぎもんやで」という会社の仲間の評を得たのである。

しかし、克枝は木村と結婚しても木村の妻ではなかった。会社に殉

じたのである。彼女は御用組合である曙会の婦人部長として得々としていたのだ。勿論無給であるが、それで満足であり、克枝の「生きがい」でもあった。曙会が解散になると同時に克枝は会社を休み出した。在郷軍人会支部長林と克枝の駆け落ち。子供のいない木村にとって少なくとも克枝の駆け落ちはショックだった。木村は、普通の夫婦のようではなかったが、それでも克枝を愛していた。三章は明らかに中だるみである。奥野健男は『美しい女』を退嬰的完成といっているが、正に退嬰という言葉が自然であるかのように退屈を感じさせる。そのせいでもあるまいが「美しい女」という言葉も五回ほど現われるだけである。駆け落ちした克枝はシヨンボリ帰ってきた。彼女のご機嫌を取るのは簡単である。つまり「何らかの絶対権をもった時代の権力者となれば良いのだが、木村にとってはこの位我慢のならないことはない。が克枝は次に勲章に引かれる。木村の親戚の清水という五十年配の男で今度勲六等を貰ったというその話に克枝は飛びつく。克枝は木村に対し「あんたなんか人間やあらへん。うち、もうあんたを殺すか、自分が死ぬかするよりしようがあらへんや。」という。「ほんとうか、殺すとか、自殺する」という言葉は木村の思考力を停止させるのだ。つまり絶対とかほんとうとかつくものはキリスト一人である、ということである。克枝は居たたまれなくなり、又家を飛び出す。

最終章である四章に入り、「美しい女」という言葉は十四回にふえる。武藤の妻になったひろ子は赤坊に乳を含ませながら云う。「うち何でも多すぎるんや。メンスやって、四日も五日もあるんやもん」。側では武

藤が寝ている。武藤は電車の運転手九ヶ月にして助役になった。しかし、字が書けない。悪戦苦闘する武藤。それが原因で骨と皮だけに痩せて了った武藤。「おれ死んでも、助役の仕事、やりとげて見せませ」とかたくなに云う武藤。家出した克枝だったら木村が助役になったら手をたたいて喜び、赤飯を炊いて祝つたらうが、ひろ子は生れたばかりの赤坊をあやしなからそんな武藤に冷たい。それどころか木村に向つて「うちを好きといつて」と迫まるのだ。

武藤は死ぬ。まるで他人の死を迎えるようなひろ子。ひろ子は老人のような武藤の兄と同棲し始める。克枝に家出された木村は女日照が我慢出来なくなり、ひろ子に結婚を申込む。その途端克枝の居場所が分り、克枝を迎えに行く。ひろ子が複雑な事情から、すぐに来れないこともあり、ひろ子を裏切つても克枝を迎えに行く。「いうまでもなくその私を支えていてくれたのは、私のあのほんとうの美しい女なのだ。」木村は「いまでも、この世のきちがいめいたもの、悪魔めいたものへの対立する平凡さへ、それとたたかい得る光と熱を与えてやりたいと願っている。」と云い、最後、しかし克枝は「まだ私という人間が分らないらしいのである。」と結ぶ。『美しい女』は、「深夜の酒宴」と比べると文体は軽くなり、文章にみがかかっている。しかし、一番問題となるのは最初に書いたように、全部で四十数回に亘つて出てくる「美しい女」の存在である。クリスチャンが読めば神という人もいるだろう。が次のような意見もある。

「深夜の酒宴」、「重き流れのなかに」、「深尾正治の手記」、「永遠なる序章」、「病院裏の人々」などの初期作品で椎名は、ごろつき、宿無し、廃類者、行商人などがうごめく、無気力、タイハイ、コッケイ、悲惨がいりくんだ下層庶民社会を局部的に設定して、転向者の心理でその世界をえがき出してみせた。もともと、これらの作品価値は作中にちりばめられた転向心理のひだをカメラのひだに変えてしまったような内面的な弾力性で、リアルにヴィヴィッドに下層庶民社会のアナキイな人間関係や生活の実体をえぐり出したところに価値があった。椎名の存在理由は、かれが戦後作家のなかでは、日本の下層社会を内部的にえがきうる唯一の作家であるところにあるのである。この椎名の特徴は、そのまま拡大されてゆけば、必然的に、不況、戦争、敗戦とつづく時代的な転換の底に、うごめいて生きてきた下層庶民の生活や心理の二十年にわたる推移を、微視的にえぐり出しうるはずであった。

ところが椎名自身は、これとまったく反対に、「赤い孤独者」あたりから、転向心理を観念化する作業にとりつかれはじめ、実存だとか自由だとかという独断的な、無智な観念をふりまわしはじめたのである。(中略) 椎名は、下層社会のあいだを悶えあるいは体験を内奥からえぐり出すかわりに、その間に身につけた処世術を観念化する方向へそれてゆき、コミュニズムのかわりにキリスト教的な観念へと昇華していったのである。(中略) 「美しい女」で、椎名は戦争期の現実をとりあげた。うすのろな私鉄労働者「私」のなかにあら

われる美しい女の幻影は、いうまでもなく椎名の意識のはぐらかし、とぼけによってつくりあげた虚体のようなものである。(後略)

〔注〕

- (1) 斎藤末弘―評伝椎名麟三(朝文社 一九九二)
- (2) 船山馨―椎名麟三全集22(冬樹社 昭五十二・十一)
- (3) 白井吉見―生への激情・椎名麟三「永遠なる序章」について(個性 昭二十三・九)
- (4) 本多秋五―椎名麟三の転機(近代文学 昭二十四・四)
- (5) 『日本の文学』六十八「椎名麟三・梅崎春生集」(中央公論社 昭四十三・一後書)
- (6) 手塚富雄―椎名麟三氏の「邂逅」を読む。(群像 昭二十七・十二)
- (7) 吉本隆明―戦後文学は何処へ行ったか(芸術的抵抗と挫折) 未来社 昭三十四・二)

A Critical Essay on Rinzô Shiina (I)

—From *Shinya no Shuen* to *Utsukushii Onna*—

Hiroyuki NISHITANI

Rinzô Shiina is a member of the “après guerre” generation. He is an author and a Protestant. This is quite a rarity among Japanese today. His most important work is *Shinya no Shuen* (Midnight Shuen). This book was published in 1947.

Key words; Liberty, Existentialism, Absoluteness, Love, Communist Party of Japan